
Genesis restart

restart

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Genesis restart

【Nコード】

N35630

【作者名】

restart

【あらすじ】

「君を幸せにするまで、俺は死んだりしないから」

クライシス王家には二人の子供がいた。

病弱な兄と、魔法に関して、とんでもない才能を持った妹。

兄はいつ死んでもおかしくないほど体が弱く、不治の病にかかっていた。

あるとき、専属医に兄の余命を宣言される。

このままだと、半年も持たないらしい。

「お兄ちゃんは、私の全てだから——」

誰よりも彼を大切に想う妹は、兄が死ぬことなど受け入れられるはずもなかった。

プロローグ

——暗い空の下で、少女の泣き声が響いていた。

そこは少女しか知らない秘密の場所。全てが終わったら、兄と一緒にここにいるはずだった。だが、受け入れられない現実と直面した。

兄の死だ。

もう半年も持たないらしい。そんなこと、考えられなかった。兄がいない世界なんて、少女にとって何の価値もなかった。兄がいないのなら、自分が生きる価値もないのだから。

兄が死んだら、自殺するつもりだった。そう、兄と一緒に逝くのだ。大好きな兄と一緒に逝けるのなら、本望だった。

『お兄さんと一緒に、死ぬつもりなの？』

誰かが頭の中で囁いた。

あたりまえでしょ。お兄ちゃんがいらない世界なんて私にとって必要ないんだから。

「ふーん、そっか。せつかくお兄さんのこと、助けてあげられるのに。」

——え？

今度ははっきりと聞こえた。勢いよく振り返る。

「ねえ、助けてあげるよ。」

そこにいたのは若い金髪の男だった。

鬱陶しいくらいにここにこと笑っている。というか、どうしてここにいるのか、彼がだれなのか、いやいや、そんなことより。

「お兄ちゃんのこと、助けられるの……？」

男は、笑みをよりいっそうに深くした。

「君がなんだってできるといふなら、助けることは容易いさ。」

少女はその言葉に食いつくようにして言った。

「なんだってする！お兄ちゃんが助かるなら、私はなんだってでき

る！」

男は、少女の答えを聞き、満足したように言った。

「そっか。じゃあ、いまから僕が君に教えることは、誰にも言うてはいけないよ？これを守れるなら、君のお兄さんを助けてあげよう。」

一方、クライシス家城内。

「陛下、もう魔法の学習のお時間だというのにカナン様がどこにもいらっしやらないのですが。どうなさいますか？」

娘の世話係、私の言葉を聞き、国王は腹立たしげに吐き捨てた。

「放っておけ。恐らくあいつは、あの出来損ないのことでまた泣いているんだろう。探すだけ無駄だ。そのうち戻ってくる。貴様はもう下がってよい。」

あまりの言い草に、私はくちびるをかみ締めた。出来損ないというのは、病弱な兄、ゼロ様のことだろう。実の息子に出来損ないとは、なんて人だ。

「かしこまりました。」

国王のもとから下がり、私はふと外を見た。雨が降ってきたようだ。もうすっかり暗くなっていた。

カナン様は、いまどうなさっているのだろうか。お外にいられるようだったら、風邪を召されてしまうかもしれない。

だが、そんなことを考えても意味がない。どこにいるかもわからないのだから。時計を見ると、午後六時を指していた。

「失礼します。」

扉をあけ、室内に入る。すぐそこに置いてあるベッドには、国王が言う出来損ない、ゼロ様が眠っていた。起こさないように、そばにある椅子にゆっくりと腰掛ける。

「あの、レイファさん……」

ベッドから声が投げかけられる。それはとても弱々しい声だった。「ゼロ様。申し訳ありません。起こしてしまいましたか？」

私は慌てて言った。ゼロ様は力なく首を振った。

「大丈夫。あの、カナン、いや、ドールのことなんだけど……。」
私は頷いた。

ドールと言うのは、ゼロ様の妹、カナン様のことだ。

カナン様は、中性的なその名前を気に入っていなかった。

こんな男の子みたいな名前は嫌だ、とぼやいていたカナン様に、ゼロ様がつけた名前だった。

（「カナンはすごく可愛いから、そんな男の子みたいな名前は似合わないよね？ そうだな、まるで人形のように可愛らしい——そうだ、『ドール』という名前はどうだい？ カナンらしくて、似合ってると思うよ？」）それ以来、ゼロ様はカナン様のことをドールと呼んでいる。

「ドール様がどうかありませんでしたか？」

「いや…それがさ……」

ゼロ様は苦しそうに息を吐き出した。

「ついさっき俺のところに来たんだ。それで言ったんだよ。『助けてあげるから、待っててね。』って。…どういう、意味なんだろう？」

私にも、それはよくわからなかった。でも、ドール様が『助ける』というなら、きっと何かあったのだろう。

「わかりませんが、いいことかもしれませんよ？ ドール様の魔法の才能は本当に凄い。ゼロ様を助ける術が見つかったのかもしれない。」

「そうだといい、という願望だったけれど。」

「そうかな……？ だと、いいんだけど。」

「そうですよ。きっと。」

私が精一杯笑いかけると、彼は弱々しく笑みを返した。

「お兄ちゃん、私、やったよ。やったからね。」

冷たい雨が絶えず降る中、少女は呟いた。その顔には笑みが浮かんでいた。

「お兄ちゃんのこと、助けてあげられたんだからね。」

そんな少女のことを見ていたのは、金髪の男。

これで彼女の兄は助かるだろう。そう、病氣自体はなくなる。まあ、他にも便利な特典はあるけれど。

「おめでとう、ドールちゃん。これでお兄さんは助かるよ。でも、僕が言ったとうり、君はお兄さんのもとから去らなければいけない。いいかい？」

僕が言う。少女は頷いた。

「わかってる。でも、最後にさよならくらいは、いいよね？」

「もちろんだよ。」

僕はにつこりと愛想笑いを張り付けた。彼女は満面の笑みで言った。

「本当にありがとうっ！お兄ちゃんが助かって、本当によかった。ありがとう。」

「いいよ。僕は君たちみたいな子を助けたいんだ。こっちこそ役に立ててよかったよ。ありがとう。さあ、君は早く行くんだ。」

彼女は一度だけお辞儀すると、城へ駆け出していった。僕は、笑っていた。

第1話 悪魔の契約

彼女、ドールが兄を助けるために行ったのは、悪魔との契約だった。

悪魔との契約を行えば、契約者の能力は上昇、とてつもない力が手に入る。

その力は、どんな怪我や病気も、簡単に治してしまえる。歳もらない。ようするに、『不死身』になるようなものだった。

そして、その能力を、他人に分けることもできる。兄を助けられるというのは、そういうことだ。

ドールは、契約後、その場で兄に自らの力を少し、ほんの少しだけ分け与えた。距離など何の問題もない。ドールの力、すなわち悪魔の力を少しだけわけ、病気が治り、体が丈夫になるように与えたのだ。

全て、いいように思えた。だが、悪魔の契約には欠点があった。それは、いつか契約者が悪魔の狂気に飲み込まれると言うものだ。狂気に犯されれば、契約者は悪魔に体をとられ、心を失ってしまう。いつ暴走するかもわからない。

だからこそ、ドールはゼロのもとから去るのだ。

ドールだった。それは夢じゃなく、現実で、真夜中にドールがやってきたのだ。

そのとき、俺の体は、何故だかとても調子がよく、いつもの苦しさ、痛みが微塵に感じられなかった。まるで、それ自体が消えたように。

「ね、助けてあげたよ。」

ドールが言う。いまは、何もわからなかった。どういう意味だかわからない。

「何言ってるんだ？」

俺は尋ねる。ドールは首を振った。

「すぐにわかるよ。ね、でもね、お兄ちゃんのこと助けたから、さよならなんだ。」

「え？」

ドールはにつこりと笑った。いつもと変わらない、無邪気な笑顔だ。だけど、何故だろうか。不気味に感じるのは。

「ごめんね。寂しいけど、もう会えないの。」

「なに、言ってるんだ？」

声が震えるのがわかった。それは、ドールの言葉は冗談には聞こえなかったのだ。

「だから、さよならなの。」

ドールの瞳から、涙がこぼれた。ドールは、あの子は、笑いながら泣いていた。まるで喜びながら、悲しむように。

次の瞬間には、ドールは消えていた。跡形もなく、どこにもいなかった。

そして、それからドールは、行方不明になった。俺が見たドールが、最後だったのだ。

あの子は、まるで存在すらなかったかのように、容量いっぱいになったファイルを全て消したときのように、全てが消えてしまった。だれも、見ることが、叶わなかった。

第2話 旅立ちの決意

俺は、昔外出用に着てた、黒いコートを着た。それによって、俺が身につけるものは全て真っ黒だったため、いかにも怪しい黒ずくめの人になってしまった。

俺の髪は黒じゃないが、むしろ黒に近い藍色だから、余計に怪しかった。これで鎌でも持ったら、さしずめ死神のようだ。

鏡を見て、ため息をつく。不審者発見、ただちに捕らえよ。勘弁してくれよ。

俺は用意していた剣をとった。レイファさんにお辞儀をする。

「じゃあ、ちよつくら行つて、ドールのこと連れ戻してきますよ。」

本当はそんな簡単なことじゃないだろうけど。そんな、いまから辛気臭くなんてやってらんない。

「はい……。ですが、体調は本当に大丈夫なんですか？」

当たり前だった。ドールが、俺のために命を懸けてくれた。

どうやったかは知らないけど、それと引き換えに、俺はこの体を手に入れたんだろう。自由に動く、体を。

「大丈夫。なにも問題はないさ。」

外に出ると、まだ真っ暗だった。あたりまえだ、夜中だもん。

俺は振り返つて、城を見た。もう一度、ドールを連れて必ずここに戻ってくる。二人で、笑つて。

そして、レイファさんに視線を移す。

「私、いろいろと調べてみたんですが、ゼロ様のこの様子を見ると、恐らくドール様が行ったのは悪魔の契約でしょう。契約を行うと莫大な力を手に入れますが、いずれは悪魔に心を飲まれます。ドール様は、そうなつてゼロ様を傷つけるのを恐れたのでしょうか。」

よく調べたものだ。俺はなんだか感心した。本音をいうと、なんで俺が助かったのかとか、ドールがなんでいなくなつたのかとか、

全然わかってなかった。

ダメダメな兄だった。

「だから、ドール様と会ったとき、ドール様がすでに悪魔に飲み込まれてる可能性も出てきます。そうになると、戦いはきつと避けられない。」

ドールと戦うのは避けたい。いくら俺が、剣技に関しては一通りの教育を受けていて、それが得意でも、あの子には今、悪魔のサポートがついているのだ。

いくら俺が悪魔の影響を少しばかり受けていたとしても、敵わないような気がした。

やっぱりダメな兄だった。

「まあ、なんとかするからさ。レイファさんは大変だけど、父様のお守りをしててよ。」

俺が言つとレイファさんは苦笑した。

「それは、なかなか大変ですね。」

「だよね。」

さて、そろそろ行こう。だれかが来たら大変だった。俺がまた後ろを向くと、レイファさんが頷くのが見えた。

「レイファさん。俺は、誰の目にも留まらず、行き先を誰にも知られないままに、行方不明になるから。そこらへん、よろしくね。」

「わかりました。ですが、もし、いま見ている人がいたらどうするんですか？」

俺は肩を竦めた。

「それは困ったな。じゃあ、そのときの俺は生霊でレイファさんに会いに来たってことで。」

「わかりました。そうします。」

俺が笑つと、レイファさんも笑った。

「じゃ、行つてきます。」

レイファさんに手を振って。

一見、俺は手ぶらのように見えるが、実は荷物やら剣やは全て

コートの中に入っているのだ。

仕込み名人だった。

「旅のご無事を……。」

かくして、病弱少年（いやはや、17って少年かな？まあ、どっちでもいいか）ゼロは、生まれて初めての、冒険に旅立ったのであった。

……俺としては、この旅はそこまでファンシーなものでもないし、ラブコメとかでもないけどね。

第3話 主人公失血死疑惑発生中

「それで、探してるのはこの女の子なんですけど、ご存じないですか？」

「いやあ、悪いけど見たことないね。他をあたってくれよ。」

「そうですか……。」

家を出まして、現在地はファルンと言う町。クライシス王国、クライシス家の城がある、隣の町。

妹探し、ぶっちゃけると家出だが。あれから、もう2日たった。

俺は相変わらず、ドールの写真を持って聞き込み調査中だが、いまだ情報はなにもなかった。まあ、瞬間移動とかできそうだし。しようがないのかな。

……でもドールって、ファルンの町大好きだったよな。お菓子いっぱい売ってるから。まさか、知ってるのに教えてくれないとか？もしかして俺が怪しいから？ロリコンだと思われてる？

いやいやいやいや、そんなことないだろう。だって俺はまだいたいけな17歳児。10歳の女の子の写真持って聞き込みしてて、何がおかしい。

自分がおかしくない、ということを感じて壁に頭を打ち込んでいたところ、通行人に変な目で見られた。やっぱり俺は変人だった。

「あもう……。」

ああ、やっぱり俺って変人でロリコンなのか……。しょうがない、しょうがないよ。だって俺だもん。世間知らずのお坊ちゃまだもん。なんでこんな真っ黒な服着てきたんだろう俺。この服のせいで変質

者度2割増だよ……。

って、ん？

「大丈夫……ですか？」

俺と同じ年くらいの女の子が、俺のことを見ていた。女の子のほうへ顔を向ける。

俺は普通の対応をした。

「ん？ああ、大丈夫。ちょっと自分と戦ってただけだから。」

自分と戦うことは壁に頭を打ち込むことと何か関係あるのだろうか。

女の子はそれを聞くとちょっとだけ安心した風だったが、またすぐに慌てて言った。

「あの、額から血が……。」

んにゃ？血？

額に手をやると確かに何か生温い液体が付着、というか流れ出ていた。手を見ると、赤い液体が。どうみても血だった。

「あら、本当だ。でも心配しないで。大丈夫だから。」

あれ？

そこまで言ったところで、世界が大きく揺れた。額から流れ出る血が、勢いを増しているような気がした。

あれれ？

慌てて手で押さえたが、そんなこと、何の意味もない。血がどんどんと溢れ出てくる。足がふらつく。目の前の女の子が駆け寄って

きたのがわかった。

俺はこのままだと、失血死か。馬鹿だった。俺は何でこんなことを……。この世界、結構気に入ってたのに。残念だった。

世界が暗転する瞬間、ドールの姿が見えた気がした。

こんな馬鹿な理由で死ぬはずもなかった。

第4話 唯一の手掛かり

真っ暗な世界だった。何もなく、だれもいない。何がなんだかわからない。

俺は何でこんなところにいるのか。

立ち止まってても仕方がないから歩いてみようと思いたが、地面の感触すらなかった。

でも歩ける。不思議な感覚だった。

歩き始めて少したって、閃いた。夢の中だ。きっとこれは夢だ。そうだ、いつ眠ったかは知らないが、これはきっと夢だろう。

「お兄ちゃん。」

声がした。ドールの声だった。でも、どうせ夢だ。そう思ったが、あることを思い出し、考え直す。

レベルの高い魔術師は、人の夢に入り込むことができる。そうだ。ドールだったら不可能なことじゃない。

俺は急いでドールの姿を探した。前方には確認できない。辺りを見回すと、ちょうど右斜め後ろの角度にその姿を認めた。俯いていて顔は見えないが、あれはドールだ。距離は、数100メートル離れているようだった。

「ドール！」

俺は走った。そのドールが本物であることを願って。

でも、おかしかった。走ってるのに、距離が縮まらないのだ。ドールが動いた様子はない。俺自身が進んでないのか？床が俺の足のスピードに合わせて逆方向に動いているともいうのか。

「お兄ちゃん。私を……」

俺は思いつきり足を踏み切った。精一杯、ドールに近づけるように空を飛んでみた。跳躍力には自信があった。もとより、身体能力は高い方なんだ。

まあ、普通なら走り幅跳びで数100メートル飛べる人はいないが。これは夢の中だ。俺はたった1回の跳躍で、ドールのもとに辿り着いた。

……走ると駄目だけど飛ぶのはいいって、本当に床が動いていたのだろうか。

まあ、なににせよ、とにかく、ドールに触れられる位置まで来たのだ。

俺はドールを抱きしめた。精一杯、力強く抱きしめた。夢の中だとしても、それでも、抱きしめたかった。最愛の妹に触れたかった。

「私を……」

そこで、ドールがまだ何か言っていることに気づいた。体を離す。とはいっても、ドールの肩をしっかりと握っているけれど。

「どうしたんだ、ドール。」

俺がそう言ったとたん、ドールがいきおいよく顔を上げた。

「私を殺して」

そう言ったドールは、泣いていた。あの時のように。ただ、いつもと違ったのは。

ドールの綺麗な、金色の瞳が、まるで血のような、赤色の瞳に変

わっていた。真紅の、赤だった。

「どうして？殺してなんて、俺は――」

言い終わる前に、ドールがまた遠ざかっていく。俺は歯を食いしばって叫んだ。

「ドール！俺はお前を迎えに行く。絶対に助けに行つてやる。だから、それまで待つてくれ！」

遠ざかっていくドールの顔が、少しだけ笑ったように見えた。

……あれ？

俺は、誰かの家で眠っていた。しかも、きちんと布団の中で。眠る前の記憶が飛んでいて、状況がよくわからなかったが、寝ててもしょうがないから、体をおこす。俺は、コートを着たまま寝ていた。中に入っている武器や、荷物も無事だった。

少しばかり呆然としていると、そばにあつた扉が開いて、1人の女の子が顔を覗かせた。

「あ、よかった。おきましたか？」

女の子は部屋に入ると扉を閉め、布団の横に座った。

「びつくりしましたよ。急に倒れるから。」

笑いながらも、女の子は続けた。

そして俺は、その言葉で記憶の欠片が繋がった。

そつだ。そつだつた。ようするに、俺は壁に自ら頭を打ちつけた
うえ血をだらだらと流して拳句の果てに往来のど真ん中でぶつ倒れ
たということか。

変人だけじゃなく迷惑者にもなつてしまったようだった。

思い出したら涙目になつてきた。恥ずかしい。そしてこの子には
とても迷惑をかけてしまった。

俺は頭で考えるよりも先に体が先に動くタイプだ。そういうわけ
で。

「ご迷惑をおかけしてすみませんでした。」

考える前に土下座して謝っていた。

17歳の少年が同じ年くらいの女の子に土下座をする図。想像す
れば、とても情けなかった。

そんな俺を見て、女の子は慌てて言った。

「いいですよ、そんなに謝らなくてもっ！それに、何か思いつめて
いるようでしたし。しょうがないですよ。人間生きてれば、そんな
ことがありますって。」

はい。確かに俺は思いつめてました。自分がおかしくないと信じ
て。ロリコンかもしれない、変人かもしれない、とかなり切実に悩
みまして壁に頭を打ち付けるといふ馬鹿なことをしてしまいました。

「……そつですね。」

理由なんて言えるわけなかった。

ふと額に手をやると、しっかりと治療されているようだった。な
んていい娘なんだろう。

「あ、そうだ。」

いまさらになって大事なことを思い出した。俺はコートのポケットからドールの写真を取り出した。

「この子、最近になって見たことないかな？探してるんだ。」

女の子に写真を渡す。彼女はその写真を見つめ、だがすぐに俺に返した。

「ごめんなさい。知らないです。」

「そっか。」

しょうがない。やっぱり地道に聞いていくしかないのか。写真をしまい、立ち上がる。

「ごめんね。いろいろと迷惑をかけて。それにありがとう。」

「いえ、こちらこそ会えてよかったです。あの、それと」

俺は扉を開け、出て行こうとしたが、女の子が何かを言いかけた。彼女を見る。

「その人を探しているなら、いい人がいるんですけど……。」

「え？」

あの女の子から聞いた話は、なかなか信用できそうなものだった。この町、ファルンから東の門をぬけ、そのまま東に数10キロ進むと、何もなくなってくる。何もないその場所に、何故だか1つの小屋があるらしい。見る人が見れば、そこからとてつもない魔力が溢れ出しているのがわかるらしい。その小屋の中に、1人の男がいる。

そして、その男は。全てがわかるらしい。全て。魔力によって、手がかりがあるものなら何でも。たとえば、写真でもあれば、人探しもできるらしい。未来が見えるという噂もある。

「ファルンを東の門からぬけて、そのまま数10キロ、か。凶暴な生物が盛りだくさんな道だよなあ。」

たどりつくまでに危険が大きい場所だ。

でも、ドールのためだ。そこに頼ってみるのが、今のところ1番の得策だろう。まあ、もつともその男が簡単に頼みを聞いてくれるかはわからないけど。

「ま、いっちょ行ってみるか。」

俺は額にはってあったガーゼを手早くとると、魔法で軽く火をだして燃やした。魔法は練習中だ。

そして、俺の額には、さっきの傷が、まるでもたらなかったかのように、綺麗さっぱり消え去っていた。これも悪魔の影響か、何なのかは知らないけど。便利なので、問題はなかった。

さて、腹をくくってこの町をどうするか。

第5話 霧と小屋

ファルンの町を出まして、5時間ほど。俺は時計を見て深くため息をついた。

遠かった。めちゃくちゃ遠かった。

門をぬけて数10キロ……数10キロってこんなに長いんだ。ぶっちゃけると、町を出てから休まずにずっと歩いてる。病弱だったあの体ではできない芸当だった。

そして今回の道はいろいろと危険だった。

俺は、生まれて初めて……危険生物に会いました。怖かった。とっても怖かった。

俺の姿を見るなり一生懸命にこっちに走ってくる狂犬。こそこそと隠れて移動する俺を目ざとく見つけて、火を噴き出す虎もどき。挙句の果てには空から狙い打ってくるでっかい鷲！これら全てを撃退できた俺を拍手してほしい。そして俺は剣を手放すことができなかった。

こんな情けない兄でごめんよ。ドール。

「……帰りたい。」

でも帰れない。ドールを見つけるまでは。

でもまあ、何故か知らんが全然疲れなかった。体力鈍りまくりだと思っのに。

だって俺は、1年以上寝たきりで、病気になってからは外に出ることも適わなかった。

だから、立ち上がる時、俺は本当に立ち上がれるのかって、そう思った。

立ち上がった。全ては君のおかげで。

もう、外に出ることなんてできないと思ってた。走ることなんてできないと思ってた。また、この足で立ち上がって、明るい空を見上げることもなくて、できないと思ってた。嬉しかった。すごく、すごく嬉しかった。

ぼんやりと歩いていたが、何かの気配がするのがわかった。大きな、ものだった。俺の真後ろに何かがいる。味方でないのは確かだよ。だって殺気がびんびんとんでいる。

俺は立ち止まると、大きく伸びをした。

「さて。……逃げるか。」

そして俺は駆け出した。

後ろにいたのは火噴き竜。そうか、こんなところに棲息してたんだ。冒険者をことごとくなぶり殺していった恐ろしい竜は。そして次のターゲットは俺ですか。そうですか。

あいにくだが俺の足は速かった。

全力で走れば、あつというまに距離が離れる。普通、全力で走れば体力がすぐになくなるが、なぜだか俺はそのスピードを保ったまま、何分もの間走っていた。

おかしかった。こんな超人的な能力を手に入れて。本気をだせば、あの竜ももしかしたら倒せるのかもしれない。もっとも、そんな危険なことを試すような、勇気も気概も、俺の中に存在しているはずもなかったのだが。

そんなことを考えてるうちに、竜の気配が全くなくなっているのに気づいた。

「はあ……やつと撒けたか。」

後ろを振り向いても、その竜はいなかった。まっすぐ走っていつ

ただけなのに、こんなに早く撒けるとは思ってもいなかった。おまけに息は全く切れていない。

「……俺って体力お化け？」

ぼそりと呟く。（無論、ドールのおかげだが。）
そして、ある異変に気づいた。

「あれ？霧がかかってる。」

そこから少し歩くと、霧がかかってる場所に到達した。うん、霧だ。

進むほどに濃くなっていく。前もすぐにみえなくなりそうだ。

俺は真っ直ぐに進んだ。まあ、何かにぶつかるかもしれないけど。ん？違和感がある。

すぐそこに、何かあるようだった。手を伸ばすと、何かにあたった。恐らく、壁だ。

小屋についたのだろうか？

そう思った瞬間、霧がなくなっていく。やはり、というべきか。そこにあっただのは小屋だった。見る人が見れば、すごい魔力が漏れ出しているのが分かる、と言ったが、魔法の才能なんて微塵もない俺には無理な話だ。（もともと、剣技などの武術の才能はやばいらしい。幼いころ、父様にべたばめされたのを覚えている。父様は正直、というか、あの性格だから嘘か本当かなんてすぐにわかる）

というか、あんなに濃かった霧は、すっかりとなくなっていて、辺りを見回すと、とても見晴らしがよくなっていた。（あの霧の意味はなんだったのだろう。だれか教えてほしかった。）

「……訪問者への思いやりシステム？」

思ったことを呟いてみた。
そんなわけなかった。

第6話 生き神

馬鹿なことを思った。

俺は、馬鹿だった。

小屋の扉を見つければ、それを開けようとしたのは俺だった。何も疑いもせず。

ノックをしても、まるで返事がなかったから。留守なのか、とも思ったけど、このまま帰るのは嫌だったし、もしかしたら寝てるかもしれないし、居留守かもしれないし。

だから俺は、扉を開けた。ギィ、という古びた音だった。こんなところに、そんなすごい人物がいるか、とは全く思えない。もしかしたら無人かも、と思った。

扉を開けたはいいいものの、中に入ると、本当に空き家同然の家だった。ほとんどなにもないし、蜘蛛の巣できぼうだいだし。ガラス割れてるし。なんだか不気味だ。

そして、歩みだした瞬間だ。

目の前が急に揺れた。それはまあ、後ろから誰かに首を絞められた感じだった。それはそうと、俺の首にはなんだか長い棒のようなものが食い込んでいた。ぐいぐいと締め付け、圧迫する。正直苦しい。関係ないが、首吊りは苦しくないらしい。首絞めはかなり苦しいが。

と、まあこんなことを考えてる暇などない。

俺は棒を両手で掴むと、後ろにいる誰かを右足で思い切り蹴飛ばすと、棒を思い切り押しのけた。後ろにいた誰かは、簡単に俺の首から棒をどけた。

奇襲があるなんて考えませんでしたー。そうか、こんなこともあ

るよな。今後生かすように反省。

のんきなことを思いながら、勢いよくふりかえった。せめて形だけでも、とは言えないが。まあ緊迫したといえそうだし。

いきなり、襲ってくるなんて。俺は巨大な男を思い浮かべたが、後ろにいたのは、よく全然違う顔だった。

「……え？」

それは、そう。若かった。俺とよりも少し年をとってるか、ってくらい。彼は長い銀髪をしていた。それを後ろに括ってるようだ。ただ、銀色の瞳。女の子にもてそうな顔というか。

「俺に何か用でもあるのか？」

俺にそっくりな男は、低い声で静かにそう言った。手には、さきほどの棒、いや、それは大鎌だ。それがしっかりと握られていた。

「いや、あの、ここに何でも知ってる、天才っていうか、何でも分かる人がいるって聞いて、たずねに来たんですけど、あのう……貴方、ですか？」

とちりながらも聞く。男は、鎌を降ろすと、「そうだ」と答えた。いや、あんた。自分で天才とか、っていや、そうじゃない。

「そ、そうですか！じゃあ、本当に聞きたいことがあるんです。お願いします。話を聞くだけでもいいんで、駄目ですか？」

男はあくまで無表情だったが、少しだけ笑ったきがした。そして頷く。すぐに顔は無表情に戻ってしまった。

彼は俺を小屋に招き入れた。

俺は遠慮などせず小屋に足を踏み入れた。いや、もう少しだけ入ってただけ。

彼は、無愛想な顔のまま。小屋の扉をしめた。

「わかつている。お前が何故ここにたずねて来たのか。お前は、答えを知るべき人間だ。だから、あらかじめ答えを探しておいた。」

ああ、本当になんでもわかるのか。それともはったりか。でも、なんだかこの人が纏う気は、周りとなんだか、全然違っているような気がした。

「俺の名前は、ビヤクヤ。そして、この国に伝わる生き神だ。」

淡々と言ったが、それはとんでもない言葉だった。

生き神っていうのは、伝説だ。そう、伝説の生き神。

500年ほどまえ、生き神の伝説が伝わった。

絶対に死ぬことのない、不死身の人間。そして、それが神と呼ばれた。

「貴方が、生き神ですか。」

嘘とは思えない。普通なら疑ってかかるところだが、彼はまるで他の人間と違うのだ。

さつき簡単に鎌を引いたのも、恐らく俺の顔を見てのことだろう。もしくは試したか。どっちにしろ、彼、ビヤクヤが俺を本気で殺そうとしたら、ものの一秒で殺されてしまうだろう。

敵じゃなくてよかった。

いや、まだわからないんだけどね。味方だと思いたい。

第7話 嬉しさ3割 恐ろしさ7割

なんだか薄汚いこの小屋で（失礼すぎる。）ビヤクヤさんと話すことになってしまった。一応なにもつつこまないけど、掃除しないのかな？というか、伝説の生き神がこんな小汚い小屋に住んでるとは、誰も思わなかっただろうな。いや、それにしても汚い。俺だったら一日でギブだな。絶対こんなところ出てくよ。それが気合で掃除するかな。うん。

「ちなみに俺は読心術は習得済みだ。」

「スイマセンでした。」

遠まわしに怒られた。

でもまあ、そんなことを考えている場合でもなんでもない。

「あの、わかってると思うんですけど、俺、妹の手掛かりを何とか掴みたくてここまで来たんです。どんな些細なことでもいいんです。何か、教えてくれませんか？」

なんだかさつき答えを探しておいたとかなんとか言っていたけど、それって、ドールのことがわかるのだろうか？この人は、俺が来ることを前からわかっていたようだったから。

「正確には17年前にわかっていたがな。」

「へえ、そうなんです……かつ?!」

この人、また俺の心を……というか、17年前って、俺が生まれた年か。もしかして、人が生まれた瞬間にその人の人生全てわかるのだろうか。この人は。でもそれって頭がパンクしそうだ。少なくとも俺だったらパンクしてる。しかも、ビャクヤさんって最低でも500年は生きてて……あれ？

「失礼ですが、ビャクヤさんお幾つですか？」

「2000とんで25歳。」

桁が違った。

「お前が、お前に定着した日に分かったんだよ。ここに来るってことが。」

「あの、定着って……？」

ビャクヤさんが俺をおもしろそうに見た。自分で考える、と言ってるみたいだ。なんだか、俺には浮かれているように見えた。

それにしても、定着ってなんだろう。俺が、俺に定着？わからん。

「今は分からなくてもいい。そのうち理解するさ。それより——」

ビャクヤさんが言いかけ、止めた。何かを感じ取ったのか、外を見る。顔を顰めると、自らの武器（と思われる。）である、大鎌を取り出した。

「何か、来るな。」

そう一言呟くと、次の瞬間ビャクヤさんが消えていた。扉が開い

ているところを見ると、とんでもない速さで出て行ったようだ。

「……速く出ていっても扉が開いてちゃどこにいったかよくわかるよな。」

追っかけよう。何が来たのか気になるし。このまま帰ってこなかったらやだし。だってどうみてもビヤクヤさんってきまぐれでマイペースな俺様キャラじゃない？（それってどんなキャラ？）

小屋を出ると、およそ500メートル先くらいの場所で、ビヤクヤさんがいるのが見えた。ついでにさっき、俺が全速力で逃げ、撒かせていただいた火噴き竜さんがいた。俺の匂いでも追って来たのだろうか。わからないけどとりあえずビヤクヤさんにはだまっておこう。冷たい視線で殺されそうな気がするから。

しょうがないし、ここは加勢しないといけないんだろうなあ。（正直やだ。めんどい。）ビヤクヤさんの実力も正確にはわからないんだし、助けにいかないと不自然。

俺はビヤクヤさんのもとまで走り始めた。

少し近づけば、おかしな光景が見えてきた。それは、ビヤクヤさんも、竜も、黙っていて動いてない様子だった。普通、竜はビヤクヤさんを殺しにかかるだろうし、そうなったとしたら、ビヤクヤさんだって竜を殺しにかかるもんだろう。

俺がビヤクヤさんのもとまで走りつくと、彼は竜に手を伸ばした。何も、警戒もしていない様子だった。竜の頭に手を乗せ、ゆっくりと撫でた。

「……えーと、ビヤクヤさんは、なにをしていらっしゃるのでしょうか？」

「手懷けた。」

早業だった。

でも、それだけで済ますにはあまりにもおかしく歪な光景。俺は、竜の正面に回った。

「うわぁ……。」「

どう見ても、竜の目はおびえているようだった。目が訴えかけていた。『こいつをどうにかしてくれ』、と。

さつき、俺のことを容赦なく襲った竜だったが、これはあまりにも哀れに見えた。人を襲う竜がとても小さい生き物に見えたのは初めてだった。

「ビヤクヤさぁん、どうみても怖がってますって。絶対恐れてますって。」「

「む、そうか？すごくおとなしかったから、懷いてきたのかと。」「

そんなわけねーよ。自らを狩るために大鎌を持った男が、すっごく速いスピードで素晴らしい殺気を飛ばしながら近づいてくるんだぞ？想像してみるんだ皆。すっげー怖いから。少なくとも俺は怖い。

「失礼な奴だな。俺は殺気をそこまでとばしていない。せいぜい二割。」「

「貴方の二割って俺の全力の何倍ですか。ビヤクヤさん。」「

どう考えても恐ろしかった。

そういえば、と気づく。とても大事なことを忘れていた。ドールのことをまだ聞いてない。

「あの、ビヤクヤさん。竜はほつといて、妹のこと……。」

「ああ、それについては心配するな。」

ビヤクヤさんは、いつもどろりの無表情のまま、竜から手を離し、俺に向き直った。

「お前の旅に、俺が付き合おう。どうせ、俺を訪ねてくる奴なんてほとんどいない。俺も調べたいことがあるしな。お前にとっても、悪い話じゃないだろう？」

爆弾発言だった。

正直、怖いです。この人の实力は、確かにすごいんだろう。数多の冒険者を潰してきたであろう火噴き竜を、たった二割の殺気で大人しくしてしまうこの人なんだから。まあ、流石生き神と呼ばれるだけのことはあるのだろう。確かに、心強くはある。

「そして、お前に拒否権はない。それを覚えておくんだな。ゼロ。」

……俺、貴方にまだ名前教えてません。それにしても横暴な人だ。

こうして、俺のドール探しの旅に、心強い仲間が加わった。仲間ができるなど考えていなかったが、まあ、しかもそれが生き神さんだなんて、思ってもいなかった。これから、俺はどうなるんだろう。ドール、ちゃんと見つかるのかなあ？

『ありがとう、リーファ。お前のおかげでゼロと簡単に会うことができたよ。』

受話器越しに聞こえる男の声。リーファ、そう呼ばれた少女は男に伝わるわけでもないのに、にっこりと微笑んだ。

「いえ、ビヤクヤさんの役にたてるなら、それだけで嬉しいですよ。」

『そうか。それにしても、お前が戻ってきてくれていて助かった。15年か？それまで、ずっとファルンの町に？』

「はい。あの方に、そこで留まっていたら彼が来ると言われてたのでそれよりも、あの、ビヤクヤさん。」

『どうした？』

「兄の、ことは？」

『ああ、アイツもそろそろ戻ってくるころだろう。なんせ、あれからもう2000年も経つんだからな。ゼロに付き合うついで、戻ってきた奴を探しに行く。』

「わかりました。じゃあ、私もなにかあったら連絡します。」

『ああ、よろしく。』

通話を切ると、そばにあった椅子に座り、ビヤクヤのことを話している最中、ゼロのコートのポケットから抜き取った、ドールの写真を見た。

「ビヤクヤさん、お願いしますね。どうかあの子を。」

コートのポケットに手を突っ込む。いろんなところをぐそぐそと探した後、しまいにはコートを脱いで地面に叩きつけた。俺のコートは、四次元ポケットのようなもので、いろんなものがばらばらと落ちた。だが、目的のものが見つかることは、けしてなかった。

「ないっ……。」

コートを何度確認しても、なかった。

「ドールの写真がない……。」「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3563o/>

Genesis restart

2010年11月7日19時07分発行